

めざせ世界遺産登録

あなたも参加団体で
活動しませんか？

埋蔵文化財は誇るべき鎌倉の文化遺産

NPO 法人鎌倉考古学研究所



設立記念シンポジウム風景

昭和46年以降本格化した鎌倉市内の遺跡発掘調査によって、地下に遺された中世都市鎌倉の様相が次第に明らかになってきました。

遺構では武家屋敷、庶民の家屋、寺社の伽藍、道路、井戸、倉庫、墓地等があり、出土遺物は陶磁器や漆器、工具、玩具、祭祀具、文房具、武具など実に広汎で、鎌倉に暮らした中世人の息吹を感じます。

発掘調査成果は、遺跡を史跡として永く後世に伝えるための、有効な手立てとなります。

『武家の古都・鎌倉 MAP』に載る世界文化遺産候補地の国指定史跡のうち、永福寺跡、東勝寺跡など5件は発掘成果に基づいて指定されました。また、鶴岡八幡宮、建長寺など8件の史跡は、指定地内の発掘によってその評価が更に高められました。

理事長の松尾宣方さんは「当研究所の活動目標は、遺跡の調査及び活用、歴史学習のサポート、埋蔵文化財に関わる情報の発信や啓発・普及等の諸事業を通して、鎌倉に相応しい調査・研究環境を創造することで、これは世界遺産登録事業の目指すところと合致するでしょう。今後の活動に、多くの皆様方のお力添えをお願いいたします」と話されていました。

小さなみどりは古都景観を護る

いざかまくらトラスト

今、世界遺産登録で再認識されているのが緑の景観です。それにも関わらず、法的な保護がなくて開発の危機に瀕している大切な小緑地は、鎌倉の谷戸をつくる山林、古都鎌倉を囲む三方の山、それに連なる逗子・横浜・葉山にも、数えきれないほどあります。

「小さな緑地は市民の手で守ろう！」と、平成20年3月<いざかまくらトラスト>が発足しました。

代表の伊藤正義さんは、世界文化遺産への登録を文化庁で推進した経験から、「ヨーロッパでは、景観を守るのも、緑地を守るのも、まちづくりを決めるのも市民。一人ひとりの力は小さくても、集めれば大きな力になります。猫のひたいほどの小さなみどりを護るために、あなたのネコの手を貸してください！」と話されています。

発足以来、梶原1丁目の景観保全の支援、北条氏名越亭跡推定地の史跡指定と全面保全の支援など地元と手を携えたトラスト活動と並行して、いざかまくら塾を開催し、これまでに三方の山の歴史的価値や、梶原・寺分の歴史について講演しました。5月は永井路子さんの講演、6月は石見銀山に学びます。皆さんのご参加大歓迎。

●お問い合わせは 電話 0467-25-3443 佐藤さんまで。



梶原トラスト支援の講演会風景

古都鎌倉の世界遺産登録って

なに？

第10回 法華堂跡はどんなところ？(後篇)

鎌倉幕府の第二代執権・北条義時は、一二二一年の承久の乱で朝廷軍を破って後鳥羽上皇らの所領を没収して島流しにし、幕府の力が朝廷を上回ることを世に示した人物です。一一八〇年の源頼朝の侍所設置以来、少しずつ権力を拡大していった武家政権は、この承久の乱の勝利によって約七百年続く全国を支配する体制を完成させたといえます。

『吾妻鏡』には「一二二四年に義時が没すると源頼朝法華堂の東の山上が墳墓の地とされ、そこに建てられた墳墓堂を新法華堂と号した」と書かれています。鎌倉時代末以後その存在が記録になく、一七九七年に書かれた『相中紀行』には「場所がわからなくなっている」とあります。しかし、二〇〇五年の発掘調査で、大江広元や島津忠久の墓の階段下の平場から、十三世紀前半に造られたとみられる一辺約8.5mの三間四方の建物跡が確認されました。この建物跡は『吾妻鏡』の記述どおりの場所であり、創建の年代も一致することから、義時の法華堂で間違いないと考えられています。

頼朝や義時の法華堂には、執権を始めとする幕府の中心人物達が年末などに参詣していました。この時代、死者を供養する法華堂は火事などで焼失した場合、再建されないことが普通だったようですが、『吾妻鏡』には頼朝と義時の法華堂だけは特例として再建されたことが見えており、二人が武家政権にとって特別な存在であったことがわかります。